

# マキアヴェリ研究史に関する一考察

柴 山 英 一

【要約】 マキアヴェリ研究の道はなお程遠く、今日依然として一種のバズルであると言わざるを得ないが、とくに最近約二十年間におよぶあらゆる角度からの真摯な研究——その何れもマキアヴェリ研究上の大問題であるが——を基盤として、今後漸次豊かな綜合化が促進されるであろうことを期待してやまない。近來たとえばグラムシの如く、マキアヴェリを社会経済史の視点から捉えようとする新たな傾向が見られ、今やマキアヴェリ研究はある意味で一転機を画するものと注目されているが、他方では思想、文化、哲学、史学史、文学、言語学、倫理学などの視角からの検討なり再考察が活発に進められている現状で、恰もルネサンス概念論争ならぬマキアヴェリ研究に関する一種掘り論者の百花燎乱たる登場ともいふべき観がある。このようなマキアヴェリ学界の現時点に立つて、前記の如く過去二十数年間の数々のマキアヴェリ研究の動向を、とくにその政治思想の路線に照明をあてて、私なりに且つできる限り批判的に取り上げ、各研究者の見解を比較論述しつつ、併せて微力ながら若干將來への展望をも試みてみたい。

史林 五〇巻四号 一九六七年七月

## まえがき（マキアヴェリ研究現況の概要）

本稿はシカゴ大学のマキアヴェリ研究家エリック・コックレーン Eric Cochrane の論文 Machiavelli を指針に、若干の私見を加えつつ論述してみたい。

マキアヴェリの謎はかつてクロッチェ Croce が恐らく

解決しないであろうと評しているが、同調せざるを得ない。

周知の如くマキアヴェリのバズルは今日まで約四世紀にもわたって解きほぐそうと検討されており、爾來各研究者達は自分達こそ先輩とは異った新しいマキアヴェリを発見したと自負して來た。然しこの難問に対して、過去約二十年ほど文献の洪水をひき起したことはかつてなかったと称してよい。たとえば哲学者、倫理道德学者、歴史家、政治科

学者、文学批評家、言語学者などによって記された諸論評

は、マキアヴェリの多角的な能力なり天才ぶりを示すものであるが、デ・マッテイ Rodolfo de Mattei も力説するよう<sup>④</sup>にとりわけマキアヴェリは今もなお依然として、政治思想の分野における我々の関心の一大対象と言つてよい。

而も実は過去二十余年間のマキアヴェリに関する豊富な文献資料の氾濫は正に嬉しい悲鳴ともいふべく、たとえば一研究者のみで、このような夥しい資料をマスターすることは殆んど不可能であり、時としては若干の研究者達が誤謬を犯す恐れがあり、事実またそうであつたからである。

たとえばマキアヴェリの思想をもつばら、彼の家系なり歴史的社会的地位の所産であるとしてたり、あるいはまた彼の政治家としての経験や当代に関する概論を試みるのに、貴重な資料であるグイッチャルディーニ Francesco Guicciardini の「リコルデア」 Ricordi politici e civili などの回想録よりは、むしろ「君主論」 Il Principe を重視することを黙認して今日に至つて<sup>⑤</sup>いる。而ももつと厄介なことは、従前ややもすればイギリス流にあるいはドイツやフランス的に着色潤色されて、それぞれの立場からのみ解釈される傾向がないでもなかつたが、このような場合にも最近二十

年間の豊富な資料がマキアヴェリ研究の難点をときほぐすのに、幾分でも役立つものと思われる。

勿論過去約二十年間の成果はマキアヴェリの諸著作の新刊や翻訳類の刊行であるとか、今日まで知られなかつた、あるいは無視された一、二の資料の発見によつて、より拡大されたに相違ないが、而も一方マキアヴェリの研究は今もなお依然として前代の文献著作に多大の恩恵を蒙つており、とくに一九世紀後期の二大著作家に依存していると言わざるを得ない。即ちヴィラーリ Pasquale Villari のマキアヴェリ伝と、幾分まとまりがないという難点はあるうが、トマッシーニ Oreste Tommasini の豊富な学識がそれでである。なおマキアヴェリ研究は今日も依然としてクローチェやマイネッケを始め、シャボロー Federico Chabod およびエルコーン Francesco Ercole——これ等の人々の著作の多くは近年再版され、英訳本もあるが——のような学者達によつて、一九二〇年代に提起された新たなマキアヴェリ研究の問題点を契機として、真摯な究明が続けられている現状である<sup>⑥</sup>。

④ The Journal of Modern History, vol. XXXIII, No. 2, 1961, pp. 113-36.

- ② Quaderni di critica, V, No. 14, 1949, pp. 1-9 におけるローチの論文 La questione del Machiavelli. 近年最近のローチに關する論議をこの中で Italy che scrive, XLII, 1959, p. 182 に Carlo Curcio, Machiavelli antimachiavellico など、一九四〇年以前に刊された龐大な著作の要論を Italia, XVIII, 1941, pp. 1-11 による論文 Paul Hyland Harris, Progress in Machiavelli studies 参照。また J. R. Hale, Machiavelli and Renaissance Italy, 1961 の巻末には、マキアヴェリ關係の英語訳本 Machiavelli 一巻付くという便利である。

- ③ Rodolfo de Mattei, Gli studi italiani di storia del pensiero politico, 1951, p. 43.

- ④ Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, CVIII, 1952, pp. 1-38. 所載のトーマス・W. Preiser の論文 Das Machiavelli-Bild der Gegenwart 及び、オットン・キールのキーンマン・トーマス J. H. Whitfield が最近のトーマスのマキアヴェリ學界を無視してそのうちに対する反論である。そのほかホイットマン・トーマスはかつて Machiavelli, 1947, pp. 11-2 及び、ローチエ派の哲學を誇張された特殊な用語に満ちた所論であるを極めつけ、またイタリア人のマキアヴェリ論評の多々なる傍聴席目撃の演出による非難の中心である。これと対してホ・カトリック Vittorio De Caparitis は Rivista storica italiana, LX, 1948, pp. 289-91 及び、ホイットマン・トーマスはすでに久しう以前にマルブスの南 (ノタリア) では解決済みの論争の風車に、自身をまわらしてしまつたやうなものと反論するが、如何なものかであろうか。その他ウォーカー L. J. Walker は一九五〇年に綿密な注釈付きで、マキアヴェリの「ローチ史論」Discorsi を翻訳したが、これはカンネッセル D. Cantimori が Rivista storica italiana, LXIV, 1952, pp. 430-5 に注出した程、印象深きもので、この或るやうにサンン G. Sasso の同誌 LXX, 1958, p. 335 参照。

- ⑤ Rassegna della letteratura italiana, LXIII, 1959, p. 509. 近年ローチ F. Flora の新全集のうちの二巻は既刊、第三巻を刊行準備中で、全巻出版の暁はマキアヴェリの大小諸作品の標準版として、一九二九年の Mazzoni-Casella 版に取って代りてあげられ、同様に書簡類にこのころは一八七三年の不備な Passeroni-Fantani 版や、また外交關係の書信などについては一九一五年のシモヤン・ニコ・パペーニ Giovanni Papini による刊行本の後を継ぎ、取って代りては必ずしも、またマルネシ Sergio Bertelli、マンブロン Franco Gaeta 共編の全集は有益であり、そのほかトリブーン Giuliano Pracucci による序文と書籍解題の付いた「君主論」と「ローチ史論」は一九六一年以前の既刊である。こぎに現在大に役立つ若干の好刊本はゴエリと Piero Pieri の Arte della guerra, 1956 を同じく彼の Legationi al duca Valentino, 1958 を始め、Antonio Panella, Opere, 1939 年及び Mario Bonfantini, Opere, 1954, 同様にサンニと Sansoni による一九四三年にルッソ L. Russo による詳細な脚注の付いた「君主論」の再版に努力した。外交文書關係の刊本には、ランタター E. Barancon による二巻から成るフランス語訳の 'Toutes les Lettres, 1955 がある。英訳本では依然として、マックキルズ C. E. Detmold の Historical, political, and diplomatic writings, 1891 を参照する必要がある。また「君主論」は現在ルッソ G. Bull により、また文學的諸作品はハール J. R. Hale によつて一九六〇年に詳細的確な訳著が出つており、同様にギルバート A. H. Gilbert の The Prince and other works, 1946 のなかで、マキアヴェリの若干の小作品を註わつておられる。この外ウォーカーの「ローチ史論」がある。
- ⑥ マキアヴェリの姿を示す彼自身の手にある新たな小片は、ギルバート Felix G. が American historical review, XLVII, 1941-2, pp. 288-92 による注釈付きの一書簡であり、さらに重要なのは、オルネキ C. Olschki が一九五四年のフランス語訳を刊行したマキアヴェリ

リの父ルナルド Bernardo の「回顧録」Libro di ricordi で、それは一四九八年以前の、今日まで不明なままの年数に光明を投じたものである。その他マンニョム W. Andreas の論文 Der Vater Machiavelli's (Historische Zeitschrift, CLXXXVI, 1958, pp. 328-33) や、Archivio storico Italiano, CXII, 1954, pp. 438-9 ヲムロロ N. Rodolfo の論文がある。

⑦ ヴィラリ P. Villari の N. M. e i suoi tempi, 1877 は周知の如く、翌年リンダ Linda によつて英訳された。トマシーニの La vita e gli scritti di N. M. nella loro relazione col machiavellismo, 1883-1911 や、クロッチェの Etica e politica, 1945 の第二版は、カスティリオーネ S. J. Castiglione によつて、同年の Politics and morals という書名で英訳されている。またトイネツケの Idee der Staatsraon, 1924 は Machiavellism : the doctrine of raison d'etat and its place in modern history, 1947 とし、英文で刊行されている。さらにマンハローの Del Principe di N. M. と同じく彼の「君主論」に関する序論などは現在ムーア D. Moore の英訳本 N. M. and the Renaissance, 1958 のなかにもあり、同訳著にはダン・トーンズ A. P. d'Entreves 教授の序文がある。

⑧ E. W. Cochrand, op. cit., p. 115.

## 一 宗教・道徳観および政治思想をめぐって

実は広く論議の中心となったテーマの一つは今日も依然として、すでに一九二五年にクロッチェによって示唆され、一九四九年にも再び彼によって断定されたものであり、な

おまた若干の条件付きで過去三十年以上にわたって、多くのイタリアの学者達によって検討されて来たものである。

クロッチェに従えば、マキアヴェリの思想のなかで今なお明らかに本質的な問題点は、道徳的善悪を超越した否むしろ、道徳律の下位にある政治学なるものの自律性に関する明確な認識であり、政治とはそれに対して叛くことは無益な自身の諸法則を具有するとの認識であるというの<sup>①</sup>は、一応正しい見解であるといわねばなるまい。勿論マキアヴェリは必しもキリスト教道徳の妥当性を全面的に否定したわけではなく、また政治的必要からの罪悪は罪が軽いという口実をもうけようとしたわけでもなかった。むしろ彼はブルーニ L. Bruni やアルムルティ L. B. Alberti が、歴史編纂や美術のなかでなしとげてしまったものに追従し、あるいはヴィン G. Vico が美学のなかでなし得たものに先鞭をつけたのであって、彼の発見した倫理道徳学は全く政治的な事柄を拘束しなかったのである。またマキアヴェリの当代政治の実際に関する客観的な描写は、必しも犬儒主義や超然たることの印しではなくて苦悶のそれであった。彼の訓戒や敬虔な死は、キリスト教信仰を拒否して来た人

ではなく、依然としてむしろ神学上のまた道徳上の教訓の妥当性を認めた証左でもあった。而も「君主論」の格言は結局人間性に対する恐怖とまではゆかないにしても、彼が発見していた驚嘆の印しであると言えよう。またマキアヴェリにとって政治と道徳とは別のものであり、道徳のルールは個人に適用される私的なもので、政治と道徳の両者は相互に接触することなしに併存するのである。

而も実は多くのマキアヴェリ研究家達はクロローチエの主題を支持したにかかわらず、若干の人々はむしろ非難しており、従ってクロローチエの見解からすれば、マキアヴェリの道徳観なり信仰に関する古くからの論争が大いに流行しているのである。たとえばプレッツォリーニ G. Prezzolini はマキアヴェリを異教徒と呼んでいるのである。——その理由は彼マキアヴェリが歴史的行為をもっぱら人間感情に帰したことや、神の権化であるキリストを無視した故に。またリッター G. Ritter はマキアヴェリを指して、正に人々を驚嘆させる人物と称する。というのはキリスト教徒なりゲルマン人の国家観とは全く矛盾している故であると、またリッターは自由とか人間力に関する折にふれての

マキアヴェリの談話を、南欧人の気質の爆発か、あるいはまたルター教で可能な限りの影響のせいに帰している。

而も哲学者や神学者達、わけてもアリストテレス派やアキナス学派の伝統を継ぐ人々は、この問題でむしろ歴史家達をはるかに凌駕して今日に至っていると称してよい。たとえばコンテ P. Conte の所論に従えば、マキアヴェリは彼自身もまがいの主義であると自認したものを発案したと非難し、故にマキアヴェリをむしろロツクやミルなどのような無宗教自由主義者の側に在って、キケロ、アキナス、サヴォナローラ、マンツォーニ Manzoni、カッタネオ Cattaneo など、真の自由主義者達に反対するものとして批判するのである。またストラウス L. Strauss はマキアヴェリが悪の教師であったこと、またあらゆる国の政治的生活を腐敗させた人物であるという古風で単純な見解を重ねて主張して来た。さらにマリタン J. Maritain はマキアヴェリを指して道徳的罪惡に値すると主張、というのはマキアヴェリがキリスト教道徳の諸原理から逸脱したのは完全に意識的であったとし、また彼はマキアヴェリを評して、これまでに人間の実際のな知性に加えられた、もっと

も強烈な毀損であると宣言する。なおマキアヴェリの諸作品は、ヘンリー八世に教会および国家における独裁政治の開始を教えたし、同王はトマス・クロンウェル Thomas Cromwell によってイギリスにとり戻されたといわれる写本を通じて、マキアヴェリを知ったのである。またマキアヴェリの諸著作は、これ等を献呈された人物の子孫であるメデイチ家のカテリナに対して数千のプロテスタント殺害を数え、またこれ等の諸著作は後世ヒットラーが実行した事柄を示唆したものであり、この意味で恐らく何人もマキアヴェリなる人物は単なる善よりはむしろ、何か反響をおよぼすのが常であるような事柄に興味をひかれたと思わざるを得ないのである。マリタンに従えば、たとえばオクスフォードの学生達があのような、いわゆる有害有毒と称せられるマキアヴェリの著作——この点私はむしろある意味で有益且つ良薬は口にながしの例に比すべきものであるとすら考えるのであるが——の危険にさらされて、精神的に致命的な損害を蒙らなかつたとすれば、恐らくウァーカー Fr. Walker の該博慎重な注釈——たとえばマキアヴェリの諸原理はどこで、またなぜキリスト教の教儀と矛盾する

かということ、さらに神なりキリスト教会はたとえその人間が徹底的に異教徒であつたとしても、如何なる人間にもまして、よりよく安全と繁栄を増進する方途を啓示し得るとの確信を学生達に与えるのであるが——によるところが大であろうと論ずる。<sup>⑦</sup>

一方かつてのトッファニン G. Toffanin の所論と同一というわけではないが、マキアヴェリを道徳家でクリスチャンであると弁護する人々もある。また若干の人々、とくにボルジア家に関する伝記作者達はマキアヴェリの賞賛する英雄達の名誉を回復させることによって、実はあえてマキアヴェリ自身の名誉を挽回したとも言えよう。たとえば彼等は、法王アレクサンデル六世が本来きわめて信仰心の篤い人物であつたとか、ポロニーニャにおけるチェーザレ Cesare の公正で高評のあつた支配をマキアヴェリが讚美したとか、また両人物何れも自由な統一イタリアの貴い夢を実現するために戦つたと力説する。<sup>⑧</sup> さらに一層強調しているのは、たとえばマラゴリー L. Malagoli で、彼はマキアヴェリこそ市民生活と宗教的徳徳的人格との統一を洞察した人物であるとする。というのはマキアヴェリは国家

を社会から切り離すことのできないものであり、市民生活と宗教から分離できないものが国家であると論ずる故である<sup>⑩</sup>と主張する。またビッツィアリイ E. Bizzarri はマキア

ヴェリの不道徳を若干の悪意ある外国人、たとえばイギリス人ポール Pole やイタリアの教会とは無関係のジェスイット教徒、あるいは恰も自由恋愛から結婚へと導いたのと同じ方法で宗旨がえをしたプロテスタント達、さらにアルプス以北の若干の学者達によって作爲されたものであると

称し、而もまた宗教裁判所ですらマキアヴェリの諸著作中には、著者の氏名以外には異議をさしはさむ何ものをも見出さなかつたと論ずる。なおクアドリ G. Quadri はマキアヴェリが当時の道徳的危機——それはもはや神学者や牧師達も如何ともできなかつたものであるが——に打ち勝つ熱望によって、大いに動機づけられたとするが、<sup>⑪</sup> わけてもワルダー Walder、ウエルネル Werner、ムラルト Muralt などは、マキアヴェリの教訓のなかの、より高い倫理的ロールを探究した。たとえばこの世の幸福を享受するためカトリック教の刷新とか、あるいはあの不幸な時代に彼は権力に対する激しい決意に燃えて、すでに紀元前三世紀のロ

ーマや一六世紀初頭のスイスで実現されたような共和国への水路を開いたものとした。<sup>⑫</sup>

而もこのような諸論議は、いわば一種制限された条件付きの賞賛を得るのであつて、<sup>⑬</sup> 以上の人々の若干はクローチェ派の見解を記した諸著作には注目せず、従つてまた彼等は少くともマキアヴェリの思想のもつとも重要な局面の一つである政治の自律性という課題についての、一般的な容認を妨害することはなかつたわけである。<sup>⑭</sup>

⑩ クローチェの *Etica e politica*, 1945, p. 251 には、シヤボー E. Chabod の *Machiavelli and the Renaissance*, 1925, p. 116 における「君主論」の現実性に賛成して、これを引用してゐる。ヘルコマンの主張も同様で、マキアヴェリはむしろ道徳的判断を意志に加ふるに行為に置かえることによつて古い道徳を撤廃するよりはより新たなものを創造した云々と。なおクローチェの主張の再開始の重要性についてはシヤボーの論文 *Scritti in onore di B. Croce*, 1950, pp. 125-207 参照。また政治哲学の探究を促進する観点から、諸テキストを再整するための労作には、マンツァ A. Pasa の *N. M., Teoria della politica*, 1958 が、ドロー G. Doro の論評がある。

⑪ このテーマはルネサンスに関する一般的概念なり解釈の一部として、シヤボーによつて *Questioni di storia moderna*, 1948 や例の *M. and the Renaissance*, 1925, pp. 149-200 へ十分に解説されてゐる。

- ③ The Journal of Modern History, vol. XXXIII, No. 2, 1961, pp. 115-6 の註を参照せよ。E. W. Cochrane の論文 Machiavelli 参照。
- ④ トンクローリ G. Prezzolini の M. antifloro, 1954, pp. 31, 115-6. 同著者によれば M. the Florentine, tr. R. Roeder, 1928 があるが Whitfield, secondo i più recenti studi, 1957, pp. 295-310 の註を参照せよ。彼の論文論評は彼の著者によって、Baron を認めよう。また、バスターン、H. Butterfield の The statecraft of M., やリッター G. Ritter の Machtstaat und Utopie: Vom Streit um die Dämonie der Macht seit M. und Morus, 1940 があるが、リッターの方は一九四八年に Die Dämonie der Macht と改題され、その英訳本であるゴック W. Pick の The corrupting influence of power, 1952 はゴック G. P. Gooch の序文を付してある。
- ⑤ フランコ P. Conte の L'errore logico del M. e i fondamenti metafisici della politica, 1955. なお最近のドイツ学界の主要な著作は Archiv Kulturgeschichte, XI, 1958, pp. 315-45 の論文 Judith Janoska-Bendi, N. M.: Politik ohne Ideologie は、トルマスと異ってトキマウヒリはイデオロギーを組織的なトクンとして、世界を變革しようとした試みた云々と指摘する。
- ⑥ Cochrane, op. cit., pp. 116-7.
- ⑦ コントラント L. Strauss の Thought on M., 1958, pp. 9-10, 175 の註を参照せよ。American political science review, LI, 1957, chap. 2, pp. 13-40 の註を参照せよ。コントラントの review, American historical review, LXIV, 1958-9, pp. 954-5 や Yale review, XLVIII, 1959, pp. 465-9 の註を参照せよ。Mosse によれば トルマウス・ギンペーターの論評参照。また、シヤツク・トリタンは
- Quaderni di Roma, I, 1947, pp. 19-31, 124-41 の La fine del Machiavellismo というイタリア語の論文を発表している。而して Ugo Spirito はその論著 M. e Guicciardini, 1945 のなかでむしろ論議を逆転させた形である。即ち真の現実政治家ならばジエスイントがトキマウヒリの実際の相續者であり、追従者であると論ずる。なお、ノーチは彼の Studies in diplomacy and statecraft, 1942, pp. 311-48 の 'Politics and morals' と題する論文を発表しているが、明らかに戦争のスタイルの影響を受けており、あらゆる恐るべき事柄に対する一大十字軍を訴えている。なお、ブレッキアの備正 トンクローリ G. Treddici の N. M., maestro di politica ai giovani, d'Italia, 1916 は、そのかに穩健な論調であり、同論文は、シエラノ M. Scherillo による「君主論」に関する「やや好戦的な刑行に代えた」のトキマウヒリとトキマウヒリの Saggi filosofi ed altri scritti, 1958, pp. 159-70 に再版されている。
- ⑧ トンクローリ G. Toffanti の La fine dell'umanesimo, 1920 にも M. e il facitismo, 1921 にも「トキマウヒリは受け容れ難い」と評議された。トクマウヒリは Rassegna critica della letteratura Italiana, XXVII, 1922 の論文 Il pensiero del rinascimento (後、Problemi di metodo critica, 1950, pp. 57 以下に徹底的に修正された) によって批判された。なお、トルマウス、F. Aldersio の M.: L'arte dello stato nell'azione e negli scritti, 1930 や、トルマウス Machiavelli, 1949, p. 202 の批評は、ジエスイントの教父達の仲間を容れず、命がけでカトリックのトキマウヒリを夢想するものと指摘した。
- ⑨ 傑作 C. Fusero, Cesare Borghia, 1958, pp. 48-9, 143 参照。同著のトキマウヒリ論は先著のトキマウヒリ Pastor のトキマウヒリ、トキマウヒリ Giuseppe Ferrara の抗弁文は穩かた、また Ignazio Dell'Orto, Il segreto dei Borghia, 1938 のそれよりは、より正確な



えは同著に從えば、チエーザンは正当な戦いによつてローニーヤを征服し、マンフレット、A. Manfredi——この人物はヒエリコの都市ファエンナ Faenza に対して、いかに合法的な要求をしたことかはなかつたのであるが——をサンタンジエロ城において、礼を篤くして賓客として推挙したとすることができるが、この點 Gustavo Saccedote, Cesare Borgia: la sua vita, la sua famiglia, i suoi tempi, 1950, pp. 443-4 の見解と一致しており、このサヘルドレーナの著はチエーザンの諸布告文や數百にのぼる解説を付して、ローニーヤ人の地方はイタリヤの如何なる地域よりも啓蒙をされ、正義と人民達のより大きな満足の元に支配されたことを確認しよう。

⑩ フレトール L. Malagoli の *M. e la civiltà del rinascimento*, 1941, pp. 19-20 参照。実は *società* とか *civiltà* あるが、*stato* とか *organizzazione* なる單語が、一六世紀でなく近代的な意味で理解をされていゝわけである。

⑪ E. Bizzarri, *M. antimachiavellico*, 1940, pp. 16-7, 44.

⑫ G. Quadri, N. M. e la costruzione politica della coscienza morale, 1947, p. 202 以下の capitolo 4 参照。なおブルデリシオと「ソニッパソ」に關する批評は、*Giornale critico della filosofia italiana*, XXII, 1941, pp. 177-81 以下。

⑬ *Studi svizzeri di storia generale*, II, 1944, pp. 69-128 所載のフネダー E. Walder の論文 M. und di Virth der Schweizer. (なお *Rivista storica italiana*, LXIV, 1952, p. 481 のマンテーヤールの見解参照)。また W. Kaegi, Vom Glauben Machiavellis (Historische Meditationen, I, 1942, pp. 89-117) は、マキアヴェリの信仰と學識とを區別して、マキアヴェリの関心はむしろ後者にあつたことを認めてゐる。なおトナルト L. von Muralt の *Machiavellis Staatsgedanke*, 1945 参照。

⑭ English historical review, LXII, 1947, pp. 96-9 のマンドレーウキのレビュー Augustin Renaudet の所論参照。

⑮ Cochrane, op. cit., p. 118.

## 二 マキアヴェリの方法論をめぐって

近年重要な論争をまき起した今一つの解釈は、マキアヴェリの新機軸は彼が取り扱う諸問題の処理方法に在るとの主張である。彼の方法とは結局、中世から近代への徐々に發展するプロセスに關連して彼を位置づけることであり、一五世紀のヒューマニズムと一七世紀の自然科学との緊密な關係を多くの學者達に識別させようとしたのが、一応彼の方法の主要な点であるとする見解である。①その他の解釈としては、マキアヴェリの方法論とオルシェキ L. Olschki の所論との間の著しい類似点に注目して、政治問題に關するマキアヴェリのアプローチは本質的に帰納的であるとの結論を下している。カッシレル E. Cassirer の意見によれば、道徳談議は「君主論」のなかでは何等役に立たず、著者マキアヴェリはもっぱら政治生活の専門家で、共和政治と君主論の何れにも超然たる姿勢で、政治技術のレッスンを施したと論ずる。②なお事実オルシェキはつぎのように主

張する。即ちマキアヴェリは自然現象と同様に、政治現象も、帰納的な思考方式によって見出される内在的な諸法則に支配されるという仮説に基いて、歴史を経験科学に変え、また政治を一般的普遍的法則の機構に組み入れた云々と<sup>③</sup>。かくしてマキアヴェリの科学的な問題の取り上げ方が、彼を有能な一史家たらしめたわけで、シュミット K. Schmidt に従えば、歴史というもののなかで物事の本質でなく、量のみに着眼してガリレイ物理学の基本觀念に先鞭をつけた派手な年代記編者達や人文主義者のグループ以来、最初の著作者たらしめた。またラマツト R. Ramat によれば、マキアヴェリの科学的なアプローチがむしろ彼を、恐らくは一人の悪い史家たらしめたというのである。その理由は、マキアヴェリは終始一貫その英雄達を史的関連なり時代から引き離して、永遠の象徴化した人物であるから云々と<sup>④</sup>。実はマキアヴェリの著作は自然科学と同様な方法の痕跡を示しており、彼の特色はむしろ単なる史家ではなく、くりかえしを重んずる一自然科学者としてのそれであるとも言える。

実は以上の諸テーゼは少くとも、これまで看過されてい

たマキアヴェリの思想の若干の局面に對して、注意を喚起した。たとえばキアペッリイ F. Chiappelli は、マキアヴェリが格言の絶対性を確立しようと試み、またマキアヴェリはしばしば当時の流行語なり辭句に對して、より以上理論的な意味を与えたとする。またプレゾオリニは同様にマキアヴェリが終始一貫、政治は自然と同様一定の法則に従って作用すると考えている云々と指摘した。而してセサイデル E. D. Theisler は当代の諸現象に関するマキアヴェリ特有の、觀察の正確さと客觀性を主張した。なおまたルノードがマキアヴェリのもっとも重要な功績として主張するのも、正に以上の觀察であり、而もまた一面彼によれば、マキアヴェリの行動のプログラムは殆んど夢想に基くもので、政治生活における經濟や文化の重要な要素を看過していると力説する<sup>⑤</sup>。

実はマキアヴェリにおける一種科学的な性格の探索は、今日多くの困難に直面しており、第一科学的という言葉自体が種々異つた意味に解釈され得る。たとえばオルシュキだけについて考えても、それは活動的な政治力、ヴィルト *virtu* およびフォルトゥーナ *fortuna*——恰もニエート

ン物理学における引力と慣性に相当する——への還元を意味するし、またこの科学的という表現は、オルシュキ自身の一種学問的な用法——たとえばエルコールやホイットフィールドに芽生えた雑多な解釈の混乱に対する抗弁——を意味するとも言えるし、それはまた歴史知識に関する厳しい合理的理論的体系をも意味する。ともかくも、この科学的という字句に関連して、どのような意味が考えられるにしても、たとえば聖書のなかの比喩に適用した場合全く不適當と思われるが、シャポーに從えば、マキアヴェリの場合、觀察はそれ自体が目的ではなくて、将来の行動への手段にすぎず、而して行動の過程は冷たい打算というよりは、より多く非科学的なまた時として非現実的な激情の所産であったと結論する。事実デ・カブラリイースはシャポーおよびサッソに追従して、ルノードが熱情と科学は何れも、マキアヴェリの思想のなかに二つの異った要素なり契機として併存するという妥協案をあえて拒否して、前者即ち熱情は後者即ち科学を完全に支配すると主張する。この点マキアヴェリはとりわけ情熱の人であったし、はてしないそして恐らくは実現不可能な理想への欲求が、彼をして種々觀

察をなさしめ、時として誤解に陥らせたのである。<sup>⑧</sup>

加うるに実はマキアヴェリの引用文を分析すると、彼の資料駆使の方法が必しも科学的でないことがわかる。たとえばメーメル F. Meinel はマキアヴェリのもっとも初期の著作でさえ、終始一貫リウイスを歪曲していると主張するし、またメスナル P. Mesnard は「君主論」のなかの不適當と思われる論題なり箇所的一切を、できるだけの完全な分析を欠いた恐れがある故であるとしており、さらにスカリオーネ A. Scaglione によれば、マキアヴェリは自然科学的な問題の処理方法を認めない分野において、科学知识を探究することによって、単に帰納法でも演繹法でもない寄せ集めのごった煮をもって終る云々と<sup>⑨</sup>。さてマキアヴェリはしばしば古代と近代史の何れにも注目したが、必ずしもそれ等から一般的法則を引き出すためのデータを得るというのではなく、むしろ彼がすでに心ひそかに公式化していた法則を実証するためであった。而も「Vita di Cas-tuccio Castacani」の典拠に関するホイットフィールドの調査は、如上の見解なり姿勢とは一応矛盾するかに見える。というのは該伝は全く過去に起った事柄に関する物語

を意図したにすぎないし、またマキアヴェリが依存を余儀なくされた年代記などと同様の誤りを犯したことを証明するものであるからである。而も実はマキアヴェリの諸格言は、政治的現実の客観的調査というよりはむしろ、人間性に関する諸原理に基づくもので、それ等の若干は相互に矛盾し合う類のものですらある。<sup>⑩</sup>

マキアヴェリの軍事的学説はピエリ P. Pieri に従えば、<sup>⑪</sup>ローマ軍に関する観察に依存するところが大であり、而もこのローマ軍たるヤリウィウスの観察を無視する見解であるとする。ピエリの結論によれば、マキアヴェリは一般に信じられているように、火器を低く評価しすぎたのではなく、軍隊を過大評価する誤りを犯したと指摘し、さらに私も同感であるがマキアヴェリの真の業績は、軍事科学が政治学の一部門であるとの、一種戦略的なヴィジョンに在るとするのである。<sup>⑫</sup>

問題はホイットフィールドも言うように、依然として鶏と卵のディレンマのまま残る。というのは実はここで一応問題を棚上げにして、かつて一九三一年さらに一九四九年に再肯定されたルッソの主題——たとえばマキアヴェリは

政治学の英雄であり、一芸術家の魅力を一英雄の哀感と結合させ、また理性的行動よりはむしろ、純化された行動によって特殊から一般に上昇したとする——に立ち戻りたい衝動に駆られる。なおまたマキアヴェリの思想にはみじめな思いをさせられた人の、個人的な反撥の形跡はないというルッソの警告に対してではないが、ケーニヒ R. König と共にブルクハルトやホーボーン Hobohn あるいは一九二七年に「N. M. artista」を著したワルゼル Walsers に復帰したい誘惑さえ覚える。ケーニヒの示唆によると、マキアヴェリはルネサンスの画家達と同様に、面白からぬ現実から夢のなかに逃避し、彼が変え得なかった世界を、実行でなく沈思されるために、美なるものに変形理想化した云々<sup>⑬</sup>。かくしてマキアヴェリは結局三つの戯曲と一つの小説および言語に関する一論著をはじめ、「君主論」や「ローマ史論」や多くの作詩も試みたが、リドルフィ R. Ridolfini も言うように、恐らくマキアヴェリは作詩した時代よりもむしろ、その作詩法を基礎に散文を書いた時代の方がよりベターな詩人であつたらしい。なお例の「十年記」Decennali は勿論「マンドラゴラ」Mandragola は、彼の政治思

想に関する幾多の反省を含んでいることはたしかで、たとえばカルリマコ Callimaco は一種の君主のようなもので、この人物によってヴィルトゥがフォルトゥナに打ち勝つのである。なおこの「マンドラゴラ」は勿論イタリア演劇の最初のものではなく、またリドルフィが想像するまでもなく、事実その前後に書かれた最善の劇作でもなく、むしろもっとも消耗した生氣のない人間の生命のはてなり、乾ききった魂の鏡に関するものでさえあり、この点マキアヴェリは例のモラヴィア A. Moravia と同様の芸術家であったとも言えよう<sup>⑧</sup>。而も現にマキアヴェリの文学的作品の純美的な価値に関する、より以上の研究を欠いているのであるが、ルッソは依然として、つぎのような結論を懐いている。即ち「クリチア」Ciziaですら、そのモデルの如何なるもの——たとえば主役が単に道化芝居的なものにすぎないブラウトゥス Plautus や、登場人物が月並みな型にはまったポッカチオなど——よりもはるかにすぐれている位に、新鮮で独創的なヒューマニティの感覚を含んでいる云々と。なおまた前記リドルフィおよびウリウ、F. Uivi の何れも、同時代の多くの人々と同様マキアヴェリにとって、模

倣は創造への一種の刺戟を加えるもので障害とはならなかった云々と、一致した見解を述べている<sup>⑨</sup>。想うにマキアヴェリは慎重な帰納法の過程を通じて結論に到達する態の科学者ではなく、むしろ彼は特殊のうちに内在する一般を発見した人物であり、彼はその思想をはなやかな警句や機知にとんだ諺で要約したり、真に迫まる描写や創造的イメージで補強、而して彼の政治的著作と文学的諸作品との微妙な相違点は、前者にとつては芸術が基底をなしており、後者は芸術で一貫していると言い得よう<sup>⑩</sup>。

⑧ Journal of the history of ideas, IV, 1943, pp. 21-49 以下論文 H. Baron, Towards a more positive evaluation of the fifteenth century Renaissance 42-45; Medioevo e rinascimento, 1954, pp. 311-40 論文 Garin, La cultura fiorentina nell'età di Leonardo.

⑨ E. Cassirer, The myth of the state, 1946, chap. 12.

⑩ L. Oltschki, M. the scientist, 1945, pp. 25-6, 29.

⑪ Tübinger Vorlesungen, 1949, pp. 111-29 論文 Schmid, M., in Grosse Geschichtsdenker 42-45; Renat, Per la storia dello stile rinascimentale, 1953, pp. 77-118 論文 II Principe 参照。

⑫ Fredi, Studi sul linguaggio di M., 1952, pp. 45-6.

⑬ Dupré Theseider, N. M. diplomatico, 1945, pp. 51 ff.; Renandet, Machiavelli: Etude d'histoire des doctrines politiques, 1924 以下第二章 46 他 Revue historique, CXCV, 1944, pp.



の写本に関する論文があり、さらにハールは *M. and Renaissance Italy, 1960*, pp. 213-4 に資料を付けて、「結局「クリチア」はよくオリジナルな戯曲であると指摘している。

② Cochrane, op. cit., p. 122.

### 三 マキアヴェリの用語および

#### 章句に関連して

実はマキアヴェリの諸著作間の明らかな矛盾を解く鍵を、彼のいわゆる科学的方法のなかで見出す試みで失敗して、歴史家達は他に解答を求めようと奮起し、若干の史家はまず第一にルッソの三〇年前の提案を取り上げた。即ちルッソはマキアヴェリが結局多くの思想に対して名目だけでなく愛着する人物であったことを想起して、マキアヴェリ自身の継続的な精神状態を知ることが、調和なり一つのまとまりを示すことになり、彼の思想を個別的に探究するのみでは殆んど役立たないことを示唆した。① 実は不幸にして大抵の伝記学者達は、今日までややもすれば単に彼の思想を一章で、詳細な個人的伝記を別章で取り扱うという調子に、両者間の関係には全く注意しないで、いわゆるヴォルテール流の慣習を踏襲して来たにすぎなかった観がある。② リド

ルフィの「*Vita di N. M., 1954*」——同伝記はその博識は勿論、人間性に関する感覚および近代イタリアなり一六世紀フィレンツェの混成語の文体の研究で賞賛されているが——を待つまでもなく、ルッソの提案は十分探究されたし、③ またハールの「*Machiavelli and Renaissance Italy, 1960*」を待つまでもない。④ 何れにしても前記の人物伝と思想家とを切り離すことは、若干誤解を招く恐れがあらう。而も伝記的取り扱いに対して幾分でも感謝したいのは、より多くのことが今日マキアヴェリの生涯なり時代の詳細について知られている事実である。⑤ たとえば彼の勤務した官庁の機能や、彼が選ばれた事情、あるいは彼の外交上のキャリアという工合に。而してリドルフィの無比の言語学者としての能力のお陰で、永らくヴィラーリやトマッシーニを典拠として容認されていた誤謬も、今や改められるようになった。

同時に学者達のなかには、眼をマキアヴェリの思想から、それが表現せられる言語の方へ転じた多くの人々があった。即ち彼等はマキアヴェリ自身の作品の文脈、あるいは他の人の著作に就いて用いた言葉の、正確な意味の結論を得よ

うと試みた。たとえばキアペッリ Chiappelli は stato とか *virtù* というような、重要な語辞に関するエルコーレの慎重な解説に示唆されて、マキアヴェリはしばしば文体の故というよりは、より多く正確を期す目的で、文体構成法や語彙<sup>①</sup>についての一般的に認められた基準を破ったと指摘している。また彼はエルコーレと同様に、「国家」についての近代的な概念はすでに、マキアヴェリにおいて十分に発展させられているとさえ主張しており、而も彼はエルコーレが国家概念の条件なり資格は、通例市民生活と称するもので、それは国民という概念が地方 *Provincia* によって示されると同様であると述べる以上には、何等付言しない<sup>②</sup>。一方ヘクスター J. H. Hexter によれば、「君主論」に出て来る *stato* という単語は一一四回のうち一〇九回が、ものごとの状態よりはむしろ政治と関係があると指摘し、さらに彼は一〇九回の実例のうち若干を除いて、この単語が行為の主体としてでなく客体として現われており、而もそれ自体単独で行動するものとしてではなく、人々が取得あるいは喪失または保持するものとして出現する云々と指摘する<sup>③</sup>。*virtù* という単語はさらに厄介で、たとえば

エルコーレにとっては、政治的統一たる国家を形成し保持するのに必要なエネルギーなり意志力を意味したし、ホイツフィールドにとってはマキアヴェリの場合、明らかに *virtù* に関する一種のドクトリンは皆無で、この点他の多くの言葉と同様であるとしており、さらにフェリックス・ギルバートにとっては少くとも、ベルナルド・ルッチェルライ Bernardo Rucellai によって比喩的に用いられた医学上の語辞の内容を含むものであり、シャボローに従えば少なくとも「君主論」の場合は、エルコーレと同様の意味を有する<sup>④</sup>。ホイツフィールドに従えば、マキアヴェリの場合 *politica* およびその派生語は常に、*civile* とか *buono* また *incorrotto* とごうような市民の、よき、清廉な<sup>⑤</sup>などの言葉づかいを連想するもので、何等退化した語意を含むものではないとし、さらにたとえば *ordini* という単語は、常に市民生活の構造なり制度に関係があるとす。同様 *fortuna* という語はサツンに従えば、一種神秘的な物質界を超越した力とは無関係で、単に人間性の極限を意味するものであり、たとえばもっとも実力のある人間でさえも、彼自身のうちに内包する不明瞭な地帯であり、また



この地帯たるや彼を拒否して、歴史的情勢の支配力が彼の破滅を引きおこすものであるとする。⑩ 實はたしかにマキアヴェリの用語法の研究は始まったばかりで、研究は依然たとえはある一つの単語の意味が、一五二七年の場合も一五〇二年と同じであったと仮定する傾向のために、妨げられている。而もまた語辭の研究は依然として、諸単語の背後にある思想を明らかにするためにも、あるいは後世になってから、それ等の語辭に付与された新しい語意に徴して、一六世紀の言葉づかいについての誤った解釈を回避する上にも、きわめて重要な価値があろう。

同時に他の歴史家達は、マキアヴェリは何れかというと難解な章句で、当時の流行から押して、より以上の推敲が不必要になった思想および仮説によくも言及したと指摘し、かくして彼等はマキアヴェリ在世時代の知的文化的環境を通じて、彼を理解しようと試みて来た。たとえば当代の市民生活の研究で、「ローマ史論」の共和主義を証明し得ることを期待し、またベトラルカやジョヴァンニ・シモネッタ Giovanni Simonetta を一瞥することによって、すべてをポリエピオスに依存する傾向を軽減することを望んで、⑪

彼等はまず第一にマキアヴェリの直接の先輩達、とくに一四、五世紀の人文主義者達に注目した。⑫ 而もまた彼等はたしかにマキアヴェリをうまく弁明するために、ルッソが *caccia ai Precursori* と称するように、マキアヴェリの先駆者達の思想を追求否むしる逃避する誘惑に抵抗しなければならなかった。それは恰もフットボールと同様、ゲームの進行中はメンバーを取り変えることなく一競技者から他のプレイヤーへと送球されるように、⑬ 換言すれば彼等は、マキアヴェリをその時代に関する専断的な定義の枠のなかに、押しこめようとする人々の落し穴に對して、自らを守らねばならなかった。たとえばルネサンスを快樂主義で特徴づけるクアドリ G. Quatri の場合、自我の礼賛とするマラゴリー、古代模倣とするバターフィールド H. Butterfield、古代イタリア人の血液のなかのローマ精神の再生と説くブルーノ Bruno など、⑭ なお彼等はマキアヴェリと古典後期の著作者達——マキアヴェリはこれ等の人々を殆んど引用しなかったことは、「ローマ史論」などに徴しても明らかであるが——との間の類似点探究以上に、寄与するところはあまりなかったようである。

而も一九三八年にアラン・ギルバートが「君主論」式の構成のものをはじめ、主題の本質にきわめて関係の深い多量の論文を発見したのに刺戟されて、史家達はしばしば非常に類似したのを見出した。たとえばルノードによれば、マキアヴェリはまず第一に古代に対する劣等意識に打ち勝つための、また当代の政治的諸事件は古代のそれ等と同様に、研究の価値があったことを主張するためにも、さらには歴史と科学を同じく純粋に合理的な取り扱いにゆだね、マキアヴェリ自身それを政治学に適用するのにも、感謝に値する一五世紀の人文主義者達を有した云々と。デ・マッテイ R. de Mattei は正にプラトーやキケロから聖アンブロシウスに至るあらゆる人々が、終始一貫拒否していたこと、即ち正義と効用とは結局必しも分離し得ないものではないという問題を、始めて是認したという理由で、パルミエーリ M. Palmieri とポンターノ G. Pontano に信頼を寄せた。<sup>⑥</sup> パロンはブルーニ L. Bruni がたとえは、「ローマ論」に現われた共和政治や国民軍に関する同様の多くの観念を提供したことを指摘した。<sup>⑦</sup> 同じくギルモア M. Gilmore はポンターノの所論のうちに、シャポー(今やハール

の主題でもあるが)の主題を支持する幾多の証拠を発見している。たとえば軍事的用語で歴史を解釈するマキアヴェリの習癖は、一四九四年以後の彼の同国人達の多くに共通した一種の反映とも考えられ得るというテーゼなどである。<sup>⑧</sup> ウォーレッセ C. Vorse はフィレンツェの史家ダッチ G. Dati の「フィレンツェ史」に注目して、同著はヴィルトゥがフォルトゥナに打ち勝つ可能性を立証したとし、それは同様に現代の諸事件にも役立つと指摘している。<sup>⑨</sup> 而してマッティンダレー G. Mattingley はクワットロチエントの外交官達はマキアヴェリ以前に、バルバロ E. Baro が正に簡明に述べた原理を事実上永らく容認していたこと、即ち外交官達の任務は彼等の政府のみのために奉仕するよう拘束されており、キリスト教共和国の平和と安寧のためではないことを論証した。<sup>⑩</sup>

さてマキアヴェリが果してウマニスタであったか否かの点については、多くの学者達がアラン・ギルバートの警告——模倣は決してオリジナリティを損うものではなく、事実マキアヴェリはより早期の著作者達が恐らく自分達が主張したことの十分な意味を悟らないで示唆したにすぎなか

ったことを、さらに展開させたとする——と同意見であるのが常である。而もまたマキアヴェリの若干の章句は、ルネサンス・ヒューマニズムとは余り明白な関係のない、他の出所からの影響かと思われるのであって、たとえば「ローマ史論」などに見えるのは、まず第一に初期キリスト教父の遺書の研究をする中世神学者達である。たとえば「マンドラゴラ」の登場人物マラ・チモテオ Fra Timoteo の台詞には、聖アウグスティヌスやボナヴェントゥラ Bona-ventura および聖トマスからの、殆んど直接の引用語が発見されており、また国家の自律性に関する概念は、ホルローがずっと以前に、なおまた中世やルネサンスの法律学研究者達が最近提示したように、デューボア P. Dubois、マルシリオ Marsiglio da Padova、タ・サンフエラット B. da Sassoferrato の思想とちわめて類似している。<sup>②</sup> さらにホイットフィールドに從えば、マキアヴェリの国民軍に対するプランや、「君主論」のなかで無責任なタイラントに暗示された非難の何れも、D. Cecchi, *Riforma santa e preziosa*, 1496 や G. Savonarola, *Del reggimento*, 1497 のような著作の語彙や文体なり思想の反映であるとする。

而して大抵の学者達は、リドルフィの主題の全部を容認することに躊躇しながらも、かつてデ・サンクティスやウイラーリによって注目されたマキアヴェリとサヴォナローラ信奉者達との間の鋭い対照を、よほど緩和する点で意見が一致している。<sup>③</sup>

① Russo, M., p. 15.

② M. Brion, *Machiavel*, 1948 (*Rivista storica italiana*, LX, 1948, pp. 291-2) のマキアヴェリとリバーティの論評参照。

③ *Archivio storico italiano*, CXII, 1954, p. 439 のロドリーコ・ド・グレイソンが、*Vita di N. M., 1954* を論評して、ロドリーコ・グレイソンが英訳している。ローレンツォの注②参照。なおロマン・ド・ラ・ロシェの論評は、唯一のロドリーコに注目した文体論であり、この点サンツォの *Rivista storica italiana*, LXVII, 1954, pp. 303-8 に賞賛している。

④ ベロンは *Journal of the history of ideas*, VIII, 1947, pp. 241-8 に、ロマン・ド・ラ・ロシェの政治的著作者達に関する新見解を発表している。なお Ridolfi, *Opuscoli di storia letteraria e di erudizione*, 1942 はマキアヴェリ関係の一章の外、彼の友人で弟子でもあるジャン・ロッセティ D. Giannotti に関する伝記を含んでいる。

⑤ *Italian studies*, XI, 1956, pp. 72-91 のマキアヴェリ N. Rubinstein, *The beginnings of N. Machiavelli's career in the Florentine Chancery* 参照。また D. Theisler, *N. M. diplomatico* 及び、彼のマキアヴェリが作者であったに相違ない膨大な量の外交文書に拠っている。



リビスタ B. Barbadoro, *Il problema politica* を考へ。また *Rivista storica italiana*, LXVI, 1954, p. 306 にキミンの在野を考へ。

⑳ Studies in the Renaissance, III, 1956, pp. 47-60 の論文 *Chimore, Freedom and determinism in Renaissance historians*.

㉑ Jacob, *Italian Renaissance studies*, 1960, pp. 94-112 に *Hale, War and public opinion in Renaissance Florence* を考へ。

㉒ マナーマン C. Vorese 著 *Rassegna della letteratura italiana*, LXIII, 1959, pp. 373-89 をべし p. 382 にキミン G. Dati のマナーマン史に触れしむ。

㉓ G. Mattingley, *Renaissance diplomacy*, 1955, chap. II と同く *Facets of the Renaissance*, 1959, pp. 19-40 の論文 *Changing attitudes toward the state*.

㉔ *American historical review*, LIII, 1948-9, p. 233.

㉕ マナーマン新編註本全集第五十七巻 (*Neuphilologische Mitteilungen*: *Bulletin de la Société neophilologique de Helsinki*, LVII, 1956-7, pp. 1-13) 所載 G. L. Huovinen, *Der Einfluss des theologischen Denkens der Renaissancezeit auf Machiavelli*. また *Ercole, La politica di M.*, 1926, p. 114 は「この問題が一層研究せざるを得ない期待をこぼし、その他より広範な比較対照はマナーマン D. Maifei やキミンなどの研究に見られる」。

㉖ リビスタの *Vita di N. M.*, 1954, pp. 15-6 は「ルビンの *Machiavel*, 1943, pp. 201 以下の内容とはちと対立しており、また *Modern language review*, XVII, 1949, pp. 45-59 のキミンマナーマンの論文 *Savonarola and the purpose of the Prince* についでに「ガレンが *Il Quattrocento*, 1954, p. 132 で快心の作と称しつゝ、サヴォナローラとキミンニズムに関しては「リドルフ・イ自身 *Vita di Savonarola* があるが、最近ではグレイソン C.

#### 四 難問打開のための若干の視点

実はマキアヴェリの問題に対する解答は多種多様で現在に至っている。たとえばラマットにとってマキアヴェリは、革命的な時代のもっとも革命的な代表者であり、ルネサンスの政治学法典である「君主論」のなかで、創造的個人の社会に対する関係についての一世紀以上にわたる思索を概括する人物である。またアウグスタ・ブックにとって、マキアヴェリはヒューマニズムの危機の代表者で、悲観論が否応なしにサルターティやブルーニの調和的な政治社会を建設する人間の能力に対する信頼感にとって代ったとするのである。またギルモアやフェリックス・ギルバートによれば、マキアヴェリは当面の諸問題についての解答を古代に依存する点では、人文主義者に追従するが、方法なり結論は全く彼等と無関係だとする。さらにハイドン H. Haydn に従えば、マキアヴェリは全く新世代に属し、経験的観察に熱心で、反ルネサンスおよびキリスト教人文主義への公然たる拒否に駆り立てられた人物であると主張する。<sup>④</sup>

難問打開の一つの可能な方法は、マキアヴェリの直接の先輩達よりはむしろ、彼の同時代人達と比較するに在る。

たとえばマキアヴェリは正しくルター、モア、ド・コミューネ P. de Comynnes と同時代であり、ルターと同様ローマ教会がキリスト教の腐敗墮落に責任があると主張したし、またモアのように彼は急速な社会的変貌が、古典の復活と同時にあり一致すると言明した。さらにド・コミューネと同様に彼は、具体的なもの、現実的なものに興味を覚え、ルイ一世のような君主を賞賛した。然し勿論そのような類似点の故に、フィレンツェとそれぞれ独・英・仏間のもっと深刻な差異を隠蔽することは許されない。<sup>⑤</sup>

他面マキアヴェリと関係のある人々についての研究が、しばしば卓見を提供してくれる。たとえばアルベルティ R. von Alberti は多年にわたって、同時期に関するものも重要な著作の一つのなかで、マキアヴェリをサヴォナローラからセーニ B. Segni やヴァルキイにおよぶ半世紀以上の、巨大な政治思想運動の一配景に位置づけた。<sup>⑥</sup> 同様にフェリックス・ギルバートは、フィレンツェ古文書保存所の記録を多年苦心探究の結果、大法官庁のマキアヴェリ

の同僚達がしばしば彼の見解の多くを分担したことを証明したし、さらにギルバートはリウイウスに關する今一人の解説者であるベルナルド・ルッチェルライの友人達が早くも一五〇二——六年の間に、同様な諸問題について論じつつあった事実を発見した。<sup>⑦</sup> なおマリオ・ダッディオ Mario d'Addio は一五三三年に死んだサラモーニ M. Salamoni の法律用語のなかに、マキアヴェリの思想の多くが隠されていることを発見、またプロカッチィ G. Procacci は「フランソア一世および一五三四年の論説『Instructions sur le fait de la guerre』の匿名の著者の何れも、マキアヴェリの「戦術論』Arte della Guerra をフランスの軍事情勢に適用し得ないことはない」と、考えた事実を指摘している。<sup>⑧</sup> 実は依然マキアヴェリの研究家達は彼の思想の発展を、デ・カプラーリースの見解と可能な限り対比することを看過してはいるが、研究者達はマキアヴェリ自身が友人且つ最初の批評家でもあったグイッチャルディーニと正に同様の言葉遣いで、同じ諸問題に本腰を入れたことを認めている。而も兩人とも、その提供した解答問の相違については、十分に意識していた。<sup>⑨</sup> かくして結局若干の人々が、マキアヴ

エリの後継者達の間におけるマキアヴェリ観の研究を続行しており、彼等はたとえバエリザベス時代のマキアヴェリ批評家達が、もっぱらジュンチレットの見解を通じてマキアヴェリを観察したこと、また一八世紀後期や一九世紀早期のイタリアにおけるマキアヴェリ賛美者達は、彼等自身の時代の先入観でマキアヴェリを解釈したとか、さらに一六、七世紀のスペインのマキアヴェリ反対者達は、翻訳書の欠除が連想させるより遙かに、または彼等が自認する以上マキアヴェリなる人物を熟知していたと指摘している。<sup>⑩</sup>

なお実はマキアヴェリの同僚達に関する研究によって、事実彼が述べたことを余程明らかにし得るし、また彼に対する後世の非難者あるいは弁護者達に関する研究によって、同様に彼が実際は述べなかつたことを明瞭にし得るであろう。而も実は告訴者達と擁護者達の何れも、マキアヴェリおよび彼の時代と、それ以前の世紀の人文主義との関連の問題には触れないままの実情である。<sup>⑪</sup>

故に問題のより有利な処理法は、通常古典古代の再生として知られているルネサンス文化の特殊な局面に関して、マキアヴェリの位置づけの研究という点に在ると言える。

彼が古代の作品のうち、少くとも若干のものに精通していたことは何人も否定しないが、幸い近年原文を苦心して比較対照した結果、マキアヴェリが何を何時読んだかをより明確に認定できるようになった。たとえばリウィウスに関する彼の知識——それはウァーカーが「ローマ史論」のなかのあらゆる引用文を探索して確認したのであるが——は、彼の年少時代まで遡るであろうし、少くとも彼がヴァルデイキアーナ *Valdichiana* の叛乱の研究のなかで、カミルス *Camillus* の話を殆んど逐語的に挿入した丁度一五〇二年まで逆戻りするかと思われる。同様にたとえばアリストテレスの「政治学」は「ローマ史論」の多くの章節のなかに反映しており、またキケロの「義務論」を妨め、とくにポリュビオスなどは「ローマ史論」の各所に見られるが、同書第一巻の最初の各章により多く引用されている。<sup>⑫</sup> なおマキアヴェリが読まなかつたものを、より明確に立証することも可能で、たとえば今日では翻訳の点でマキアヴェリに不利な、ギリシア文学に関する部分の知識を有すると論ずる例の一九世紀のツリアンタフィロス *Triantaphylos* に追隨する者は殆んどないのが常識であり、さらにタキト

ウスの示唆の方がリウイウスよりも、より大であるとする  
トッファニンの見解に賛成する人は一層稀である。<sup>⑬</sup>

而もシャポーが示したように、たとえば一方でペトラル  
カやポリッィアノの時代を、ダンテやトマス・アキ  
ナスの時代と区別し、他方ベムボ Bembo やサドレット  
Sadoleto の時代とも区別するのは、古典文学に関する知  
識というよりはむしろ、その利用なりそれに対する姿勢  
の問題である。さてマキアヴェリがなぜ古代を尊重し、古  
代の諸作品をどのように利用したかとの質疑については、  
学者達によって大いに見解を異にする。彼等はマキアヴェ  
リが諸テキストの事実を曲げたと指摘するが、ピエリィや  
リドルフイによれば古代に関するマキアヴェリの学識は、  
彼自身の時代の見解に着色づけられたと称するし、サッソ  
はフィレンツェとイタリア史の活動的で苦難の経験につい  
ての、マキアヴェリの諸観察が結局彼が読んだテキストに  
関する見解を決定したとするが、何れも論拠があり、何れ  
か一つに絞るべきものでもない。<sup>⑭</sup>

たしかにマキアヴェリの引用文を点検するにしても、ま  
たそれ等をどのように活用したかを研究するにも、依然為

さねばならぬことが数多く残されている。たとえば若干の  
マキアヴェリ解説者達は、マキアヴェリとトッキュディ  
スの相似に気づいているが、而もフィレンツェでは事実ブ  
ルーニ以来知られていた「ペロポネソス戦争史」を、マキ  
アヴェリがかつて読んだか否か確認されていないし、さら  
にたとえば「ローマ史論」第二巻第二章にあるコルキエラ  
騒乱についての反トッキュディデスの解釈は、「ペロポネ  
ソス戦争史」を誤って解釈したにすぎないものか、あるいは  
彼が外の典拠を用いたことを示すものとも想像されるし、  
またサッソに従えばポリュビオスの焼きなおしであると指  
摘しており、問題は未解決のままである。<sup>⑮</sup> 而も当面の問題  
としては、マキアヴェリをルネサンス・ヒューマニズムに  
対する叛逆者としてよりも、後継者と見做す点で何れの論  
者の見解も一致している。たとえばルッソが示唆するよう  
に、政治学のみならず古代の復活を要請する点でマキアヴェ  
リは、すでに美術や文学部門で適用されている創造的模倣  
の原理を、新分野に拡張しつつあったといつてよい。ギリシ  
ア・ローマの古代人を批判的に取り扱うことや、彼等のな  
かから彼が適切と判断したものだけを取り上げる場合、さ



らに古代なり古代人を絶対間違いない典拠としてよりはむしろ人間として考えた場合には、マキアヴェリはバロンも指摘するように、すでに一四世紀に近代人に味方したペトラルカの信奉者達と行を共にしたかに見える。<sup>⑩</sup>然し最終的な解答は、ルネサンス人文主義自体についてのより十分な定義を待たねばならないし、それにはなお若干時日を要すると思われる。

さて暫くマキアヴェリ時代の政治的現実と彼との接触到、視点を集中してみよう。実はフェリックス・ギルバートやルビンスタインなどの慎重な調査にもかかわらず、当代政治情勢の諸局面——たとえばシャポーが生前、永年にわたって研究していたイタリア諸国の内政上の革命的変貌など——は、依然として多分に未知のままである。<sup>⑪</sup>然し政治思想の研究はカプラーイースが一四四七年に指摘したように、歴史的背景に関する知識の不足からよりはむしろ、個別的に取り扱う傾向のために無理を生じ、結局ある一人の著作者の思想を主要概念——恰も政治学の自律性という工合に——にしてしまうことで、打撃をうけて今日に至っている。<sup>⑫</sup>この点については一九五〇年にシャポーが慨嘆したように、

各専門家達は自身の研究分野に執着して、事件と時代思想の間の緊密不可分な関係を完全に見失っている。その結果思想家達はマキアヴェリの思想をたとえば一つの石塊のようなものとして取り扱って来た餽があり、また政治家家達は思想を単なるプロバガンダとして片付けて来た憾みがある。<sup>⑬</sup>

シャポーや弟子のサッソが打ち勝とうとして研究したのは、正にこのようないわゆる実験遺伝学的処理法と呼ばれたもので、両者の主張によると、マキアヴェリの思想は他の著作者達の思想に関する反省または反映というよりはむしろ、政治的な事柄における彼自身の体験から招来され、従って彼の思想の研究は一五一三年の「君主論」で始まるのではなく、一四九八年の彼の最初の書翰から始まるべきであると主張する。実はマキアヴェリは当初、特殊な現象のみを観察することに自己限定をして、諸現象のなかに含まれる複雑さについては余り意にせず、まず彼はその史的環境のなかで一つの現象を認知し、さらにその特殊事項によって提起された歴史的的政治的問題に関する根本事項を、より完全に理解すべく前進し、遂に政治学および政治機構

の一般的性格に関する一概念に到達した。<sup>②</sup> そのようなプロセスの最後の段階は種別の点ではなく、程度という点で最初の部分と異なるにすぎず、たとえば一五〇二年の「ヴァレンティノ公のヴィッテルロツォ・ヴィッテルリ、オリヴェロット・ダ・フェルモなど殺害実情の記述」*Descrizione del modo tenuto dal duca Valentino nell' ammazzare Vitellozzo Vitelli, Oliverotto da Fermo, etc. etc.* や、後に「君主論」のなかでのチエーザレ・ボルジアに関する幾多の批判は、ベッペ・G. Pepe が主張するように、何等矛盾することなく結局後者は単に前者のより以上の発展である。<sup>③</sup> 従って「君主論」や「ローマ史論」のなかの各テーマは何れも、それが生起し来った出来事と不可分でマキアヴェリの思想はその起源由来の探究によってのみ、正しく理解され得よう。

而も実はマキアヴェリに関する、このような問題提起は重要な修正として、結論のすべてを必ずしも認めない人々からも、相当の賛辞を得ている。さてマキアヴェリの体験とは一応彼が現にその眼で見たところのものだけであるとするのであるが、これについてはサツソがポリュビオスに

関するマキアヴェリの取り扱ひの研究のなかで、より明らかにしている。<sup>④</sup> なおクローチエ流の認識論の立場からは、サツソが時折マキアヴェリのなかで発見する思想過程が、恰も思想と行動の論理学なり歴史学のように響くのであるが、而も主たる反論が皮肉にも以上のような研究態度それ自体よりはむしろ、そのような問題処理の支持者達が引き出した若干の結論から生じた。たとえば若干の批評家達はかつてシャポーが、マキアヴェリの知的発展に関する年代学ともいうべきものを確証したのに対して、異議を挟んだ。<sup>⑤</sup> サツソに従えば、イタリアの政治的地位が突如として効果的な行動の可能性を提供するかに見えた、丁度その時期に書かれた「君主論」と「ローマ史論」第一巻の樂觀主義は、その後漸次「ローマ史論」の第二巻と三巻が分離され、やがて「戦術論」と「カストルツォ伝」——この両者はイタリアの政治がすでに機会を逸した丁度その時期に記されたのであるが——の悲觀主義やユートピア主義に譲歩した云々と主張するが、リドルフィはマキアヴェリの生涯の危機は一五一五年または一六年ではなく、一五二〇年に到来すると力説する。一方ホイットフィールドの強調するとこ

ろでは、危機は全く起らなかったとし、マキアヴェリは「フィレンツェ史」のなかでも、より初期の著作と同様の調子で語ると論じ、さらにマロンは前記クロノロジー論は一五一九—二〇年の「フィレンツェ実情改革論」Discorso sopra il riformare lo stato di Firenze の明白な樂觀主義を無視するものと指摘した<sup>⑧</sup>。なお実は後期の著作とくに「フィレンツェ史」如きは、綿密な分析の度合いを示し得るものではない点ではシャボアやサマンはより早期の諸著作のみに追従した傾向が見られる<sup>⑨</sup>。

① 二の註④参照。

② Rinascimento, III, 1952, pp. 195-210 論文 A. Buck, M. e la crisi dell'umanesimo.

③ キネプトの The world of humanism, 1953, p. 131 以下の Makers of Modern Strategy, 1959, p. 22.

④ キネプトの Counter-Renaissance, 1950, 同著のついでにキネプトの Studi di storia, 1959, pp. 455-60, pp. 321-39 の L'anti Rinascimento di De Sanctis e il rinascimento di Machiavelli.

⑤ Umanesimo e machiavellismo, 1949, pp. 75-123 論文 E. Massa, Egidio da Viterbo, M., Lutero e il pessimismo cristiano, 444 G. Mattingley, Facets of the Renaissance, 1959, pp. 41-71 論文 H. Harbison, Machiavelli's Prince and More's Utopia.

⑥ R. von Alberti, Das florentinische Staatsbewusstsein im Übergang von der Republik zumPrincipat, 1955, pp. 53-74.

⑦ Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, XX, 1957, pp. 187-214 所載の近代政治思想の起源に関する論文 F. Gilbert, Florentine political assumptions in the age of Savonarola and Soderini 以下の同誌 XII, 1949, pp. 101-31 B. Rucellai and the Orti Oricellai, 以下の Studies in the Renaissance, I, 1954, pp. 38-48 所載の論文 F. Gilbert, The concept of nationalism in Machiavelli's Prince, 実のところは手をこたねられていない資料を駆使したキネプトの研究の広さが、フィレンツェ・ルネサンス研究者界のいかに貴重な参考となった。

⑧ Rivista storica italiana, LXVII, 1955, pp. 493-528 論文 Procacci, La fortuna del M. in Francia, なるフィレンツェのローマナーの両著と、ローネキ A. Nifo は唯の「君主論」を翻譯したにすぎないことである。

⑨ De Capraris, F. Guicciardini 1950, なるマキアヴェリの思想の若干の局面を研究する手がかりとなると思われる今一人の同時代の著作者は、例のトリネキ L. Ariosto である。この外 Sette contributi agli studi di storia della letteratura italiana, 1958, pp. 203-20 論文 Ramat, Il momento dinamico nel pensiero del M.

⑩ キネプトの基礎型の論議は依然然にマン M. Praz の M. and the Elizabethans の初版の Proceedings of the British Academy, XIV, 1928, pp. 49-77 にある。然るにその後ホムン N. Orsini などの分断的な研究を拡大して、たゞその Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, IX, 1946, pp. 122-34 に論文 Policy or the language of Elizabethan Machiavellianism を発表している。なるマキアヴェリに関する他のマンの Belfagor, IV, 1949, pp. 505-12 にある Il Cucco e il Foscolo interpreti di M. 442 Arti e memorie dell' Accademia delle Scienze, Lettere, ed Arti

- di Modena, XIV, 1956, pp. 118-35. 上記の著者は A. Vecchi  
 の Un giudizio di Agostino Paradisi sul M. キヤヴェリについて  
 Arbor, XIII, pp. 417-49. 上記キヤヴェリの著述は、著者  
 マンローロ Gonzalo Fernández de la Mora の論文「*de  
 Quaderni Ibero-americanani* 1946, p. 21, pp. 25-6. 上記キヤ  
 G. M. Bertini の La fortunadi N. M. in Spagna 及び著者  
 キヤヴェリの著述を論じた論文である。彼の Journal  
 of the history of Ideas, XXI, 1960, pp. 450-1. 上記マ  
 Marvell's 'An Horatian Ode' and M. 及びキヤヴェリ  
 の 歴史学雑誌 'Studies on Voltaire and on the eighteenth cen-  
 tury, vol. V, 1958. 所載の論文 C. Fleischauer, Anti-Machiavel  
 of Frederick II の題名を論じた論文である。
- ⑪ Cochrane, op. cit., pp. 128-9.  
 ⑫ ハトナーの著述については Rivista storica italiana, LXIV,  
 1952, pp. 430-5 のキヤヴェリを参照。  
 ⑬ Cochrane, op. cit., p. 129.  
 ⑭ Rivista storica italiana, LXX, 1958, pp. 372-3.  
 ⑮ Vorträge und Aufsätze, 1948, pp. 237-84. 上記マ  
 Reinhardt の論文 Thukydides und M. を参照。  
 ⑯ マンローロの Problemi di metode critico, 1946, pp. 25-6. 及び  
 Journal of the history of ideas, XX, 1957, pp. 3-22. 及び  
 の論文 The Querelle of the ancients and the moderns as a  
 problem in Renaissance scholarship.  
 ⑰ ノットリクスタム・キルナーは「この時期の研究にきわめて重要な問  
 題について、未刊のものが多い」と指摘し、「マキアヴェリが近代の内政面  
 の変革を一九五六年六月にベルンで述べた」として、同時録の  
 Actes du Colloque sur la renaissance organisé par la Société
- d'histoire moderne, 1958 の 177頁を論じた。彼の著者  
 Lo stato di Milano nella prima metà del secolo XVII, 1955,  
 Parte 3, capitolo I.  
 ⑲ Atti della Accademia Pontaniana, 1947-8, pp. 127-39. 上記  
 マンローロの論文 Appunti sul metodo nella storia del  
 pensiero politico. 及び D. Cantimori, Bellagor, XI, 1956, pp.  
 108-10.  
 ⑳ Historische Zeitschrift, CLXXIV, 1952, pp. 31-56. 所載の  
 の論文 Die politische entwicklung der italienischen Renais-  
 sance.  
 ㉑ Il Cinquecento, 1955, pp. 3-21. 所載の著者の論文 N. M., 知  
 るべき著者マッセル N. M., 1958 の著者 マンローロの著作に発展  
 採録された。彼の著者 New Cambridge modern history I, pp. 273-4  
 の論文 International relations in the West: diplomacy and  
 war 及び Studi letterari, 1956, pp. 197-213 の論文 Machiavelli  
 及び著者 Thukydides 及び著者 マンローロの論文 Storia d'Italia, 1959, pp. 185-  
 366 の L'Italia del M. e L'Italia del Guicciardini.  
 ㉒ G. Pepe, La politica dei Borgia, 1946, pp. 277-8. 及び  
 Rivista storica italiana, LXIV, 1952, pp. 177-207 の論文 Sasso,  
 Sul VII capitolo del Principe.  
 ㉓ キヤヴェリについては Rivista storica italiana, LXX,  
 1958, pp. 329-75. 及び マンローロの論文 Il mulino,  
 VIII, 1959, pp. 153-91. の N. Matteucci, L'utopia del M. を参照。  
 ㉔ Cochrane, op. cit., p. 131.  
 ㉕ Problemi della pedagogia, IV, 1958, pp. 35-50. の論文 Whit-  
 field, M. e la via di mezzo. 及び マンローロ American historical

review, LXIV, 1968-9, pp. 952-4で、サッソンの論文 N. M. を論評した。

② Cochrane, op. cit., p. 132.

## あとがき

実際のところマキアヴェリに関する諸問題は、依然として矛盾した憾みがあり、前記のように恐らくすべての異論に対して明快に応えることは、現段階では不可能であろう。それ故にクローチェの謎を解く鍵はなお前途遼遠であり、たしかにマキアヴェリの生涯および思想に関する多

くの局面は、将来の探究に期待する外あるまい。而も一面問題はすでにほぼ出つくした観があり、これが解明への道はなお遠く且つ険しいというのが伴わらせる実感である。<sup>①</sup>

以上、近年のマキアヴェリ研究者達の見解の主要を取り上げてみたのであるが、拙稿がマキアヴェリ研究の史的考察への何等かの道標ともなり得れば幸いである。

① Cochrane, op. cit., p. 136.

付記 本稿は昭和三九年度文部省科学研究費による各個研究「マキアヴェリ研究に関する史的考察」の一環をなすものである。

(静岡大学教授)

for their self-protection against the political disaster rather than that of simple seclusion.

*Ch'ing-t'an* was originally a leisured argument which had developed in the *Shih-tai-fu's* 士大夫 family life since the latter years of *Hou-han* 後漢, which influenced the public opinion by combining often with the fashion of personal criticism and formed some social power, that is, the so-called "*Fu-hua*" 「浮華」: on the contrary, *Ch'ing-t'an* after *Chu-lin-ch'ing-t'an* had increased a character of discussion omitting political affairs for the political refuge. *Chu-lin-ch'ing-t'an* was a prototype of *Ch'ing-t'an* omitting political affairs, and it contained also various aspects of the *Shih-tai-fu's* life in the transition period.

## A Study of Researching History of Machiavelli

by

Eiichi Sibayama

We cannot refrain from recognizing that the distance of the way to the study of Machiavelli is far greater and remains a sort of puzzle and we are anxious to accelerate gradually a rich synthesis hereafter as a basis of serious studies—each is the great problem for the research of Machiavelli—from all angles especially for about 20 years of late.

Recently a new tendency to grasp Machiavelli from the standpoint of social and economic history like Gramsci is considered as an epoch-making one in a certain meaning of the study of Machiavelli. On the other hand, its present active studies and reexaminations from the standpoints of idea, culture, philosophy, historians' history, literature, philology, ethics and so on look like the grand entrance of so-called cross-examiners on Machiavelli's research just as the idealistic dispute of Renaissance.

On the present standpoint of this Machiavelli's researching circle we are to study by ourselves and critically his political idea with our comparison and criticism of each student during the past 20 years, adding our future outlook to do our poor best.